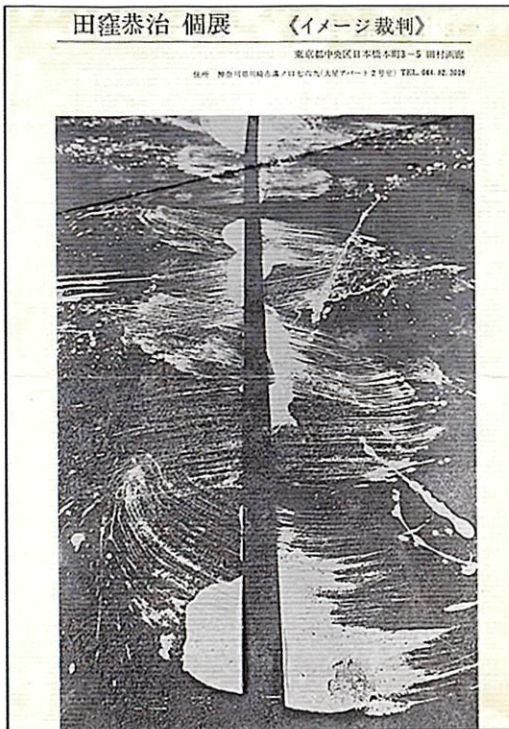


TAKUBO KYOJI



1970年～1987年

イメージや記憶をテーマに制作・発表した時期



1972年田村画廊(東京)における「イメージ裁判」の案内状



1975年パリ近代美術館「第9回パリビエンナーレ」におけるイベント



1984年 第41回ヴェネチアビエンナーレ日本館会場



1973年榎の木画廊(東京)「イメージ裁判 日付けのための展覧会」でのイベント



1987年 世田谷美術館での“公開制作”により制作された「日常—時間の層へI」

多摩美術大学在学中の1970年初頭から「イメージ裁判」というイベント（パフォーマンス）を繰り返した後、1975年パリビエンナーレでのイベントを最後に“物の記憶”を手掛かりに時間を経た廃材と蜜蝋や金箔による作品を作り始め、1984年第41回ヴェネチアビエンナーレ（日本館）へ出品した頃から1987年に世田谷美術館で公開制作した自宅アトリエのファサードを原寸に近い大きさで再構築した作品「日常—時間の層へI」から現実の建物や風景へと表現が移っていく。

1987年～1989年

「絶対現場—1987」

1987年東京・神宮前にてインテリジェントビル

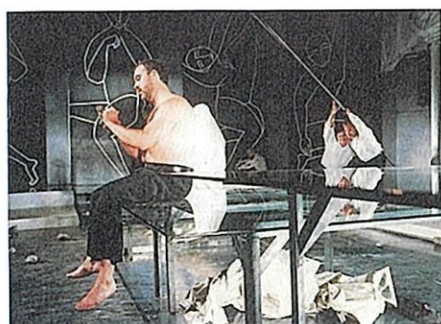
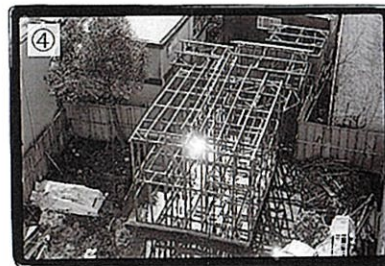
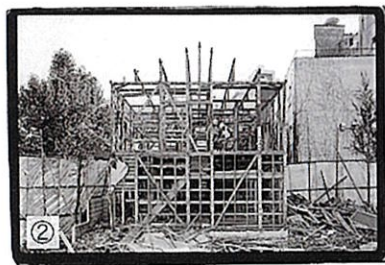
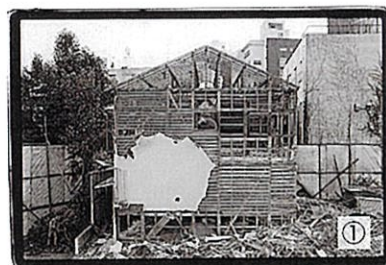
「FRUXI外苑」建設のため取り壊される運命にあった木造モルタル2階建ての住居10棟のうち2棟が鈴木了二（建築）と田窪恭治（美術）の表現の対象とされ、数ヶ月のジョイントワークの後最終形を2週間展示した。観客がその内部・外部を体験した後二人の表現の現場は解体されてジョイントワークは終了した。具体的にはまず、屋根や壁を少しずつ丁寧に取り除きながら（写真①）柱や梁、建物の基礎だけを残した後に（写真②）基礎部分をL字鋼で補強した上に（写真③）かつて畳や床があった部分に強化ガラスを敷き並べて作品が完成した（写真④）。最後に観客がガラスの上を体験した後に現場全体が壊されることをもって成立したジョイントワークは「絶対現場—1987」と名付けられ安斎重男のフォトワークとして記録された写真のみが作品の資料として残された。



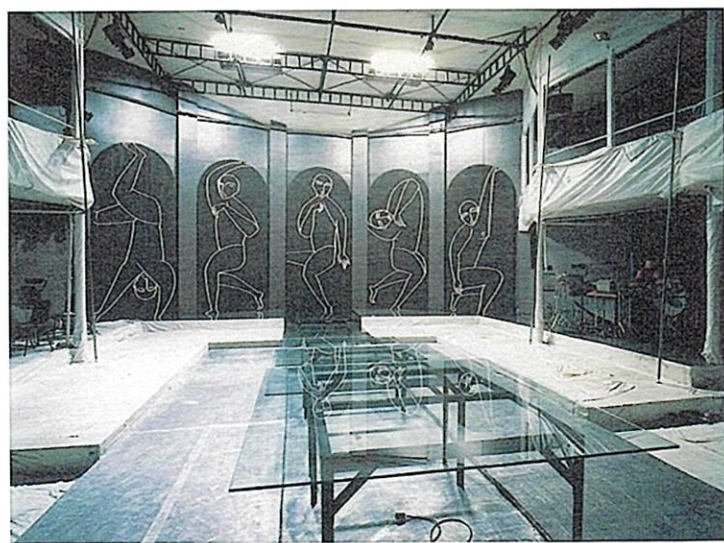
絶対現場最終形

オペラ「ゴーレム」の舞台美術

1989年イギリス・ロンドンにあるアルメイダ劇場で上演されたオペラ「ゴーレム」の舞台美術を依頼され、現地で3ヶ月費やして制作した作品。古いユダヤの話「ゴーレム」は泥人形が命を与えられ知恵がつくことによって最後には壊されていく運命を作曲家ジョン・カスケンとピエール・アウディの演出により構成された内容を田窪がゴーレムを象徴する5枚の巨大なパネルと鉛やガラス、石や黒煙、建工事用シートなどを使用しながら薄暗い空間の中、ガラスの階段の上で展開される歌手が宙に浮くような舞台を作り出しマスコミの評判となった。この舞台美術制作は“鑑賞絵画”としての美術から“使用出来る美術”としての表現の場を広げることを気付かされた作品でもあった。



「ゴーレム」の上演風景



オペラ「ゴーレム」の舞台美術

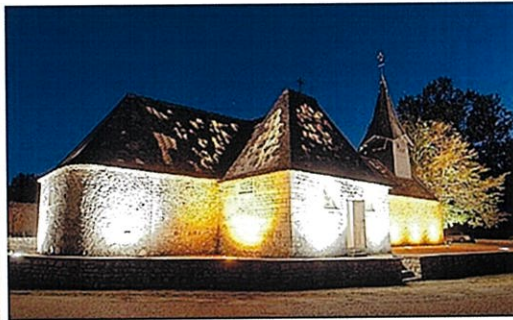
1989年～1999年『田窪恭治サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト』



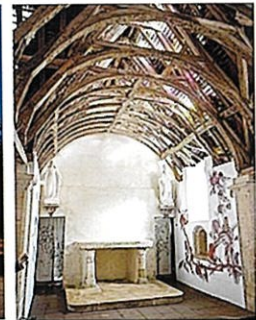
礼拝堂全景



礼拝堂内部の壁画



夜の礼拝堂



内部 ガラス瓦から射す光

フランス・ノルマンディーの小さな村に500年前に建てられ崩壊寸前だったサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂を田窪の手によって11年かけて建物や周りの環境も含めて再構築し最後に礼拝堂の周りの風景から林檎の壁画を描いたことにより地元の人々から「林檎の礼拝堂」と呼ばれ親しまれている作品。

このプロジェクトは日仏の数多くの会社や団体、個人による制作の参加や資金の援助によって完成したものである。特に日本の民間企業や個人のメセナ活動としての協力は、「日仏文化交流」の新しい形を提示した。

1987年「絶対現場—1987」を実施中、さらなる表現の可能性を追求するためその対象となる建物をさがしていた田窪がフランスに住む友人の紹介でサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂と運命的な出会いをし、その礼拝堂を作品化するために現地に住むための準備を始める。

1989年7月「ゴーレム」の舞台美術が終わった後フランスに家族と共に移住した田窪は、先ず完成イメージを3年かけて描きあげる。その間、礼拝堂がある村人を中心にアソシエーションを設立。東京では(社)海外活動事業活動関連協議会により「第3回海外貢献事業」に承認され1992年『田窪恭治サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト』支援委員会が発足されたことを受けて礼拝堂工事が始まった。

工事は、まず外観の「はつり工事」から始まり礼拝堂の天井を解体、屋根小屋組の補修工事を終え、その後それまでの素焼き瓦に加え、田窪発案の赤、黄、青、緑など7色のガラス瓦を織り込むように設置し、昼は虹色に輝く光が礼拝堂内部に入り、夜は外に光を放射する姿が現れた。さらに礼拝堂の床には新日鉄住金から提供された厚さ3センチのコルテン鋼（耐候性鋼）が敷き詰められ壁には壁画を描く支持体となる鉛の板が前面に貼り付けられた。1996年、礼拝堂内部・外部の工事が終わり新しい建物が完成し、日本側の支援委員会が解散。1997年から1999年は数多くの個人支援により、鉛の壁の上に6色の顔料を30回塗り重ね、周りの景色の林檎の木を削り出しながら壁画を完成させた。礼拝堂の完成により田窪の仕事が、フランスはもとより日本などのテレビ、新聞、雑誌などで「林檎の礼拝堂」として報道され、多くの人々が知るところとなる。

1996年～

田窪恭治のステンレス鋼による鋳鉄



広島現代美術館前庭「広島—1996」



1998年高知県立牧野植物園「感覚細胞」

『田窪恭治サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト』を実施している1995年頃考え出された鉄の鋳物。

設置される場所の必然性に応じて姿を変え増殖する作品として制作された最初の表現が広島現代美術館美術館前庭に「広島—1996」と名付けて設置された。

1998年、高知県の五台山に建設された牧野植物園の中庭に設置された「感覚細胞」と名付けられた作品では四つの水盤にこの鋳鉄のユニットが沈められ、高台から低い方へと庭の中の水路を伝って水が流れ込む仕掛けになっている。

なお、この作品から鋳鉄のユニットが敷き詰められたスペースを「感覚細胞」と呼ぶようになる。



「感覚細胞」水を張った様子



「神椿」テラスにも敷き詰められた



2007年 神椿に敷き詰められたCORQ



2004年、金刀比羅宮の新しい参集殿である、「縁黛殿（りよくたいでん）」の一部スペースに、2007年には新しく建設された「神椿」の共用部分に「感覚細胞」を設置。

2011年、「感覚細胞」は、礼拝堂の床に使用した新日鉄住金のステンレス鋼（耐候性鋼材）と同じ材料を使用して「CORQ」と名前を変えた。

2014年ユネスコ+BASFの東日本大震災後復興支援プロジェクトとして岩手県陸前高田市にある仮説図書館前の「ふらっと広場」を、また2015年長野県飯山市復活教会前広場に「感覚細胞—飯山復活教会」を設置。「CORQ（コルク）」はステンレス鋼（COR-TEN）という耐候性鋼の成分を鋳造したキューブ状のブロックで形状は5種類あり、それぞれの大きさは約10cm×10cmの正方形で1kg弱の重さ。



2011年 東京都現代美術館におけるCORQをつかった作品「林檎の礼拝堂東京ヴァージョン」





「神椿」俯瞰図



プロデュースした金刀比羅宮緑黛殿



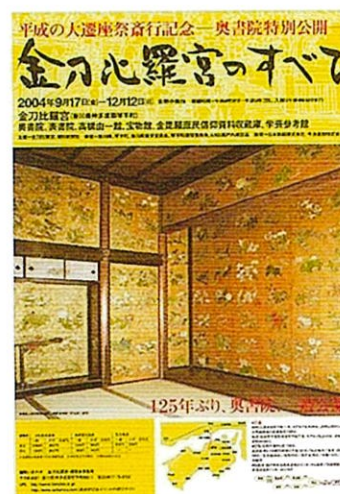
「神椿」内部の壁画



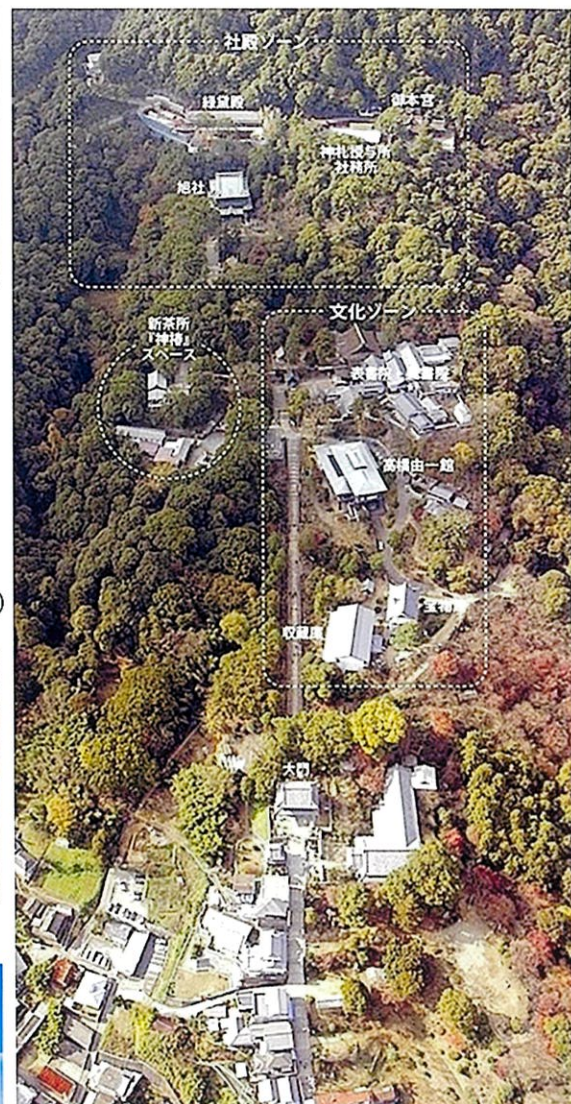
白書院に描いたヤブツバキ障壁画（非公開）



「神椿」カフェ

15万人超す入場者を記録した
「金刀比羅宮のすべて」展

パリ国立ギメ東洋美術館における金刀比羅宮の展覧会



『琴平山再生計画』のプラン

2000年に金刀比羅宮に文化顧問として招聘された田窪は金刀比羅宮の境内を「社殿ゾーン」「文化ゾーン」「散策ゾーン」「教養ゾーン」の四つに分け整備する『琴平山再生計画』に着手。

まず2004年の遷座祭を機に古い参集殿と新札授与所及び社務所の建物の新築工事を建築家鈴木了二氏に依頼し、自身は全体のプロデュースを務める。同時に文化ゾーンの活性化としてこれまで非公開だった伊藤若冲の障壁画がある奥書院を一般公開、和製油画の祖である高橋由一の展示館を旧社務所に設置し、数々の古今東西の展覧会を開催した。特に遷座祭に開催した「金刀比羅宮のすべて」展では15万人を集めた。さらに2007年には「社殿ゾーン」「文化ゾーン」を繋ぐ目的で、茶所をカフェ・レストラン「神椿」（運営・管理は資生堂パーラーに委託）として再建し室内には、境内に咲くヤブツバキの群生を呉須で磁器板壁画を描き、並行して白書院にヤブツバキの障壁画を32面オイルパステルで描いた。

2008年にはパリにある国立ギメ東洋美術館にて日仏文化交流150周年記念展覧会「こんびらさん 海の聖域展」をプロデュース、円山応挙や伊藤若冲の作品そして自身の白書院のヤブツバキの作品を、部屋として再現した展示を行い、日本人の美意識を発信。監修執筆したカタログは日仏英語を入れ、フランスの主な国立美術館にて販売された。

CORQ（コルク）による表現について

そしてこの正方形の四方にはジョイントするためのピンが出ていて、このピンによりひとつひとつのブロックが繋がり、限りなく増殖する。

田窪はこの「CORQ」が敷き詰められたスペースを“感覚細胞”と呼んでいる。

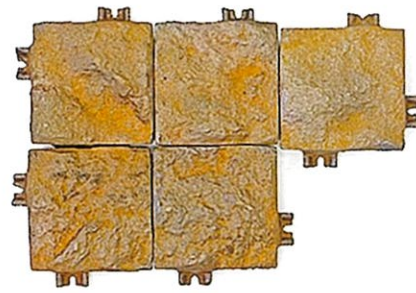
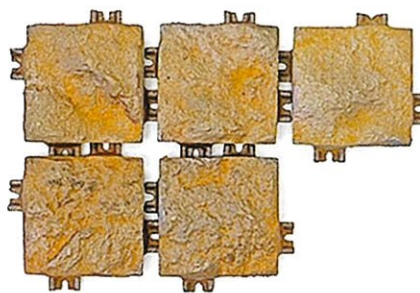
「CORQ」は特定の場所に不特定多数の人々の手によって敷き詰められ一定の広さを有した時、ひとつひとつの鉄の塊がまるで生きている細胞のように特定の場所の環境や歴史と反応し融合され新たな生命を宿したスペースとして生まれ変わることが出来る。さらにこの「CORQ」スペースは分解可能で、いつでも、どこへでも、その姿・形を変えて再生され続ける。



2011年8月 大原美術館有隣荘での個展「倉敷の風景へ」



岩手県陸前高田市ユネスコ+BASF東日本大震災復興支援プロジェクト「ふらっと広場」では子供たちも参加して制作



「CORQ」

2011年～ その他の作品



2013年 フランス大使館大使公邸 屏風「ノルマンディーの林檎」



2011年8月大原美術館 有隣荘 個展「倉敷の風景へ」有隣荘二階和室「林檎の障壁画—2011」



2015年 長野県飯綱町牟礼駅壁画「イイヅナのリンゴ」



2013年 松山空港 ステンドグラス「みかん ミカン 蜜柑」



2015年 長野県飯山市 広小路プロジェクト「林檎」



1980年代の「巨船アルゴ」 「ヘスペリデス」 「過去の扉」 「イノコズチ」 「廃墟」などの作品を館内に展示



東京都美術館北側に位置するイチヨウの
大木とCORQ®による作品
「感覚細胞—2016・イチヨウ」



イチヨウの黄葉への変化やCORQ®の
サビの変化を通じ上野の風景を対象と
した『風景芸術』



原画制作風景



原寸オリジナル画 (H6m×W13m オイルパステル)



モザイク壁画制作過程①



モザイク壁画制作過程②



モザイク壁画制作過程③



モザイク壁画完成「黄金の林檎 Le Pommier d'Or」 (自然石、金箔、CORQ®)



ロビーラウンジに展示される田窪恭治《Pommier-2020》（2020）
Courtesy of KOTARO NUKAGA, Photo by Osamu Sakamoto

